

日英文化における女性語の位置

高 島 敦 子

はじめに

女性語は社会的方言の一つであるが、これをはっきりと定義することはむずかしい。一般的に言って、絶対的女性語（いわゆる女ことば）と相対的女性語（いわゆる女らしいことば）の二種類があること、また、使われ方から言えば、主体的女性語と対女性語に分けられること、などが特徴として上げられる。

1 英語の女性語

ここで取りあげるのは、今日のアメリカ社会で一般に女性的表現と考えられている用法である。

英語の女性的表現は語彙と音韻の両面に見られる。語彙としてはまず、転義的に使われる形容詞が上げられる。good, nice, interesting などの意味に使われる *lovely*, *adorable*, *divine* がその例である。形容詞と並んで、ある種の色の名称が上げられる。*beige* (ベージュ), *lavender* (藤色), *mauve* (淡紅色) などがその例である。男性にくらべて、女性の方が細かい色分けをしていると言えよう。三番目に、*oh, dear!* (あら, まあ), *oh, my!* (おや, まあ) などの間投詞が上げられる。

音韻の面では、尻上りの抑揚が女性に多い用語と考えられている。典型的な例は附加疑問文 (tag-question) と言われているもので、*Today is Tuesday, isn't it?* (きょうは火曜日でしたね) のように、陳述のあとに相手の同意または承認を求める疑問文がつく。これと同じ抑揚が陳述文に用いられる場合もあ

る。What time will dinner be ready? (夕食は何時ですか) という問に対して、Seven o'clock? (七時ではどう……?) と答えるのがその例である。

以上は、ロビン・ラコフ著『ことばと女性の位置』(Robin Lakoff, *Language and Woman's Place*, Harper & Row, New York, 1975) を参考にしたものである。彼女は、尻上りの抑揚は、自分の考えを相手に押しつけまいとする丁寧さとともに、押しつけるだけの自信のなさ、すなわち心理的な弱さを示唆しており、それは、今日の文化的状況の中で女性に与えられている特質であると分析している。しかし、私の個人的経験によれば、附加疑問文は必ずしも女性に限られた用法ではない。語彙の面と合わせて、ここでラコフが分類し列挙している女性語は、絶対的女性語ではないことを指摘しておきたい。

2. 日本語の女性語

日本語では「あたし、お腹がすいたわ」という発言は女性の発言と考えてよい。《あたし》《あたくし》のような一人称代名詞は、本来女性しか使わない絶対的女性語である。《すいたわ》の《わ》は、女性が甘えたり丁寧に話すときに使う終助詞、と定義されている。これも絶対的女性語である。絶対的女性語の終助詞には、他に《の》がある。また、《あち》《まあ》などの問投詞も絶対的女性語と言えるであろう。

《お腹》の《お》は、敬語の一種で美化語と言われているものである。《お金》《お菓子》のように、普通名詞に《お》をつける言い方をはじめとして、《いただく》《召上る》のような敬語は、対等な人間関係においても女性の方がよく使う。しかし、男性がこれらの言葉を使うこともある。したがって、これらの敬語表言は相対的女性語であると言えよう。

相対的女性語には他に、《すてきな》《かわいい》のような形容(動)詞、《とても》という副詞、《でも》のような接続詞、そして《さん》(《くん》に対して)という接尾詞があげられるであろう。

また、男性が、たとえば「物価が上った」と動詞を使う場合に、女性は「も

のが高くなった」というふうに形容詞を使う傾向が強いことが、野元菊雄氏によって指摘されている。

絶対的女性語は、使用者が女性に限られるという点で、主体的女性語と言えるが、相対的女性語は、相手が女性である場合に男性によっても使用されるという点で、対女性語と言える。

3 日英の女性語の比較

日本語の女性語の多くは敬語であるという点が、英語の女性語といちじるしく異なる点である。しかし、敬語は丁寧な表現であるという点と、《わ》《の》などの絶対的女性語が、発言の論理性を弱めるという点で、日英の女性語の働きは一致している。

日本語の女性語が、絶対的相対的を問わず、形態的に容易に識別できることは、上にあげた「あたし、お腹がすいたわ」の例で明らかである。では、英語の場合はどうであろうか。1で指摘した、語彙の特徴をもった女性語は、ある種の形容詞、名詞、問投詞に限られており、女性の全発言の中に占める比率は小さい。ある発言が、視覚的に与えられた場合に、発言者の性別を識別する手掛りは何であろうか。この疑問をとくために、私が試験的に行った調査の結果を、次に発表したい。

まず、私の友人知人の中から、二十代後半から五十代までの7人のアメリカ人(女性6、男性1)に、調査協力を依頼した。学歴は大学卒以上。現在、日本の大学または中学校で英語を教えている人々である。

これらの人々に、英語および英訳された日本語の小説の中から、男女または男同志の会話部分を適宜に9箇所抜粋し、発言者の性別に直接言及した語(たとえば brother)は意図的に削除してタイプしたものを読んでもらい、それぞれの発言者の性を識別し、その手掛りとなった事柄を記述してもらった。使用した作品は、夏目漱石の『道草』『草枕』『明暗』、川端康成の『千羽鶴』『山の音』、そしてアガサ・クリスティー (Agatha Christie) の *Sleeping Murder* の6

篇である。

まず、発言者が女性であることを正しく識別した回答者が、もっとも多かった例を三つ紹介しよう。

例 [1]

A : When you say 'tea,' do you mean the tea-ceremony?

B : Oh, no, this is tea without any ceremony. You need not even drink it if you do not want to.

A : Well, in that case I'll be delighted.

B : Father loves to show off his nick-nacks, so...

A : You mean I ought to say how nice I think they are?

B : Well, he's growing old, and it pleases him to receive compliments.

A : All right, I'll praise them a little then.

B : You might even force yourself to praise a lot.

(*The Three-Cornered World*, 4)

A : お茶って、あの流儀のある茶ですか。

B : いいえ、流儀も何もありません。おいやなら飲まなくってもいいお茶です。

A : そんなら、ついでに飲んでもいいですよ。

B : ほほほほ。父は道具を人に見ていただくのが大好きなんですから……

A : ほめなくっちゃ、いけませんか。

B : 年寄りだから、ほめてやれば、うれしがりますよ。

A : へえ、少しならほめて置きましょう。

B : 負けて、沢山おほめなさい。

(『草枕』 4)

A は男性 (画工)、B は女性 (おなみ) である。B を女性と正しく答えた者は 5 名いた。正解者の最大の手掛りとなったものは、*loves to show off* (見せびらかしたがる) という成句の中の *love(s)* であった。want や like の代り

に love を使うのは、女性に多い傾向らしい。なお、A を男性と正しく答えた者は 2 名にすぎず、女性と間違っ答えた者が 2 名、どちらかわからないと答えた者が 3 名いた。又、B を男性と間違っ答えた者は 0 であったが、どちらかわからないと答えた者が 2 名いた。その根拠に tea-ceremony が両性志向であることをあげた者が 3 名、女性志向であることをあげた者が 2 名いた。

例 [2]

A : You are at home by yourself?

B : Yes. It's a little lonely, of course.

A : You shouldn't be alone.

B : I suppose not,

A : I can almost hear the quiet... Have you been well?

B : I lost weight.

A : And are you able to sleep?

B : Hardly at all.

A : That will never do.

B : I'm thinking of selling the house soon and taking a room in a friend's house.

A : Soon — when will that be?

B : As soon as I can sell the house.

A : The house?

B : Yes.

A : You mean to sell it?

B : Don't you think I should?

A : I wonder. As a matter of fact, I'm thinking of selling my own.

(*Thousand Cranes*, "Figured Shino," 3)

A : やはりお宅にお一人ですか。

B : はい。もうさびしいんですけれど。

A : お一人でいてはいけませんね。

(72)

B : ええ。

A : しんとしたお宅のけはいが、電話に聞えるようですよ (中略) 。おから
だけは？

B : 瘦せましたの。

A : 眠れますか。

B : 夜はほとんど眠りませんわ。

A : それはいかん。

B : 近いうちにここをかたづけて、お友だちの家に間借りするかもしれませ
んわ。

A : 近いうちって、いつ。

B : ここが売れたらと思っていますの。

A : お宅が？

B : はい。

A : お売りになるつもりですか。

B : はい、売った方がいいとお思いになりませんか？

A : さあ、そうですね。僕もこの家は売りたいと考えてるんですが。

(『千羽鶴』より「絵志野」3)

A は男性 (三谷菊次)、B は女性 (太田文子) である。B を女性と正しく答
えた者は 5 名、男性と間違っ答えた者は 0、どちらかわからないと答えた者
が 2 名いた。正解者のすべてが、"It's a little lonely." や "You shouldn't be
alone." に現われている、淋しさに対する反応が、女性のステレオタイプに一
致する、という理由をあげた。なお、A については、正解者 2 名、間違った者
3 名、不明の者 2 名であった。

例 [3]

A : Do you mean to say then that you admit you came here purposely
to annoy me?

B : Oh, no, that wasn't my purpose. I came here to get the overcoat.

A: But are you saying that while you came to get the overcoat, you also came to annoy me?

B: No, that's not it either. I came without the slightest ulterior motive. I think I'm much less calculating than you are.

A: Be that as it may, won't you please answer my question directly?

B: All right, that's why I said I came here perfectly naturally, without any ulterior motive. It's merely that as a natural result I seem to have been to be able to annoy you.

A: In other words, that was your objective, wasn't it?

B: No, it wasn't. But it may have been my basic desire.

(*Light and Darkness*, 86)

A: じゃあなたは私を厭がらせるために、わざわざ此所へ入らしたと言明なさるんですね。

B: いや目的は左右じゃありません。目的は外套を貰ひに来たんです。

A: じゃ外套を貰ひに来た序に、私を厭がらせようと仰るんですか。

B: いや左右でもありません。僕は是で天然自然の積なんですからね。奥さんよりも余程技巧は少ないと思ってるんです。

A: そんな事は何うでも、私の間にはっきりお答へになったら可いじゃありませんか。

B: だから僕は天然自然だと云ふのです。天然自然の結果、奥さんが僕を厭がられるやうになるといふ丈なのです。

A: 語りそれがあなたの目的でせう。

B: 目的じゃありません。然し本望かも知れません。

(『明暗』86)

Aは女性(お延)、Bは男性(小林)である。Aを女性と正しく答えた者が4名。男性と間違つて答えを者は0であったが、どちらかわからないと答えた者が3名いた。正解者のすべてが、Aの話し方は感情的(たとえば annoy me

という語)であるし、話の内容も感情的であるとコメントした。また、Bの正解者は3名、間違った者1名、不明の者3名であったが、正解の手掛りとして「Bは外套をもらいに来ているから男性」という点を指摘している者が1名いたのは面白かった。

ここで、以上三つの例を総合的に分析してみよう。例〔1〕の日本語には、《おいや》《ほほほほ》《いただく》《おほめなさい》のような、女性的語彙が豊富に見られるが、英文ではそのような特徴は全くなくなってしまっている。また、Aに《お茶》を《茶》と言いかえさせることによって、その男性性が強調されているわけであるが、この点も英文では判別の手掛りにはなっていない。

例〔2〕のBが女性であることは、日本語では、《さびしいんですけれど》《瘦せましたの》《眠りませんわ》等々の語彙から一目瞭然である。Aも、《お宅》《おからだ》《お売りになる》のような、女性を示唆する敬語(対女性語)をひんばんに使っているが、9行目の《それはいかん》と20行目の《僕》という言葉づかいによって、男性であることははっきりする。このような特徴は、英文にはぜんぜん見られない。

例〔3〕のAは、《私》という一人称と、《入らした》《仰しゃる》などの敬語の他には、とくに女性を示唆する語は使っておらず、話しぶりも、どちらかといえば理詰めで、一見男女の別が付きにくいタイプである(この点で、アメリカ人の回答者が、Aの話し方と話の内容が感情的であると感じているのは興味深い)。しかし、話し相手のBが、Aを「奥さん」と呼ぶことにより、その性別がはっきりする。ところが、二人称代名詞として使われる《奥さん》は、英語では性別不明の《you》であるから、日本語での手掛りは英語では手掛りにならないわけである。

そこで次に、日本語では性別判定の手掛りになっている特徴が、英文では全くその用をなさないために、発言者の性別を正しく判断できた回答者が少なかった例を二つ紹介しよう。

例〔4〕

A: I thought I heard that you would see Shimada.

B : That's right..... I'll handle my own affair anyway I see fit. Don't worry about matters that don't concern you.

A : Go ahead and do what you like. You never did care how I felt about anything..... Father would not approve of your associating with that man, you know.

B : Father? Whose father? You're not by any chance referring to my father?

A : You know very well I'm referring to your father.

B : But he's been dead a long time!

A : I was told before he died he said that he had formally broken with Shimada, and that you were not to have anything more to do with him.

B : Who told you that? I don't think I did.

A : Your brother told me.

(*Grass on the Wayside*, 14)

A : あなた島田と交際^{つきあ}しても好いと受合^いっていたようですね。

B : ああ。(中略) 御前や御前の家族に関係した事でないんだから、構わないじゃないか、己一人で極めたって。

A : そりゃ私^{わたし}に対して何も構って頂かなくっても宜^よござんす。構ってくれたって、どうせ構って下さる方じゃないんだから、……(中略) しかし御父さまに悪いでしょう。今になってあの人と御交際^{つきあ}になっちゃあ。

B : 御父さまって己のおやじかい。

A : 無論あなたの御父さまですわ。

B : 己のおやじはとうに死んだじゃないか。

A : 然しお亡くなりになる前、島田とは絶交だから、向後一切付合をしちゃならないって仰^{おつ}しゃったそうじゃありませんか。

(『道草』14)

Aは女性(お住), Bは男性(健三)で, 二人は夫婦である。Aの正解者は2名, 間違った者が2名, 不明の者が3名であった。Bについては, 正解者1名, 間違った者3名, 不明の者3名であった。これは, 正解者も含めて, この英文には話し手の性別を判断する手掛りはとくにない, と答えた者がもっとも多かった例である。Aが島田を呼びすてにしているが, この用法は男性を示唆している, というコメントもあり, これがマイナスに働いたこともわかった。

例〔5〕

A: The ginko is sending out shoots again.

B: You've only just noticed? I've been watching it for some time now.

A: But you always sit facing it...

B: But you ought to notice when you open the shutters or go out to clean the veranda.

A: I suppose that's true.

B: Of course it is. And you're facing it when you come in the gate. You have to look at it whether you want to or not. Do you have so much on your mind that you come in looking at the ground?

A: This will never do... I'll be very careful from now on to notice everything you do and imitate it.

(*The Sound of the Mountain, "The Chestnuts" 1*)

A: 公孫樹いちじくがまた芽を出してますわ。

B: 菊子は今はじめて気がついたのか。(中略) わたしはこのあいだから見ていた。

A: お父さまはいつも公孫樹の方を向いて, お坐りになってるんですもの。

B: 雨戸をあけたり, 廊下を掃き出したりする時にだって, 目につきそうなものじゃないか。

A: そうおっしゃればそうですけれど。

B: そうだよ。第一, そとから帰って来る時には, 公孫樹に向かって歩いて来

るじゃないか。いやでも見える。菊子はいつも下うつ向いて、ぼんやりと考えごとしながら歩いてるのか。

A: あら、困った。(中略) これからはお父さまの御覧になるものは、なんでも見ておくように気をつけますわ。

(『山の音』より、「栗の実」1)

Aは女性(尾形菊子)、Bは男性(尾形信吾)で、二人は嫁と舅の関係にある。Aの正解者は3名、間違った者は1名、不明の者は3名であった。一方Bの正解者は1名、間違った者は2名、不明の者は4名であった。Aを正しく女性と答えた者の手掛りとなったのは、to clean the veranda であった。これは女性の性別役割だからである。また、Bは横暴な(domineering)感じがするから男性である、と答えた正解者がいたのも面白かった。

[4]と[5]でも、[1],[2],[3]と同じように、^{わたし}《私》^己《己》《菊子》《お父さま》のような、性別を示す人称代名詞または人称代名詞的用法が、英文では性別不明の《I》と《you》に置き換えられてしまっているので、性識別の手掛りになっていないことがわかる。

さて、残りの四つの例については、とくに全文を紹介する必要もないと思うので、回答者が、発言者の性別を判定するときの手掛りとしてあげた事柄について述べるだけにしておく。

まず、女性的用法として“lovely house”の lovely があげられた(A. Christie, *Sleeping Murder*)。これは、1で論じた、形容詞の転義的用法の一例である。lovely を house (girl や doll でなく)とむすびつけると、くすてきな^{お家}という、女性的な表現になるのである。

この調査の目的は、もともと、視覚的に与えられた英語表現の表現者が、女性であることを判定する手掛りが、日本語のそれとどう違うかを知ることであった。しかし、発言者が女性であることは、必ずしも、いつも積極的な手掛りによって判定されるとは限らない。すなわち、地球上におけるもう一つの性、男性の発言と考えられるものを除いたものが、女性の発言であるという、消去

法も可能である。この意味で、発言者が男性であることを判定する手掛りとしてあげられた特徴について、ここで言及することは意味のあることであろう。

まず、“They are good lads.” (*Sleeping Murder*) の *lad(s)* が男性用語であることを正解答した者が4名いた。また、financial discussion すなわち金を工面する話 (『道草』4) と、to go over the mountain by a horse すなわち馬で山越えをすること (『草枕』10) は、男性の活動領域あるいは関心事であると解釈した者が、それぞれ1名おり、その場面の発言者の性別を正しく識別した。

以上、限られた資料と被調査者にもとづいた調査ではあったが、この調査分析の結果をまとめると、次のように言えると思う。すなわち、日本語の女性語は、形態的特徴 (morphological characteristics) によって簡単に識別されるが、英語の女性語は、用語 (diction) と、社会文化的特徴 (socio-cultural characteristics) の二点によって、類推的に識別されるのである。したがって、日本語の場合は、発言者が女性であることを正しく判定する確率は、ほぼ 100% であると言えるが、英語の場合は、その確率はずっと低いであろうということが予想できる。私の調査では、正解率ももっとも高かった例は 71% (7名中5名) であった。

4 女性的特質とその評価

何を女性的特質とみなすかということは、個人によっても社会によっても異なるであろう。しかし1, 2, 3を通じて、日本語の女性語と英語の女性語の間には、ある種の共通点があることがわかったし、ラコフをはじめ、私の被調査者のアメリカ人が、女性の特性や役割とみなしているものが、私たち日本人がそうみなしているもの (たとえば、淋しさに対する否定的反応や縁側の掃除) とあまり違わないこともわかった。そこで、今日の日本語文化圏と英語文化圏に共通の女性のステレオタイプがあるのではないか、という問題を、次に考えてみたい。

まず『広辞苑』の〈おんな〉の項を調べてみると、〈やさしい〉《煮え切らない》《激しくない》という三つの形容語が、女性の通有性として上っている。Webster's Third New International Dictionary (『ウェブスター新世界大辞典第三版』)のFemaleの項には、《passiveness》(従順であること)《gentleness》(やさしいこと)《delicacy》(優美でもろいこと)の三語が、女性の属性として上っている。また、Feminineの項には、《unstressed》(強くない)及び《weak》(弱い)の二つの修飾語が、女性的特質を表わす語として出ている。作家の故伊藤整は、セックスにおける女性の対応の仕方を〈受動的〉で〈消極的〉だと述べている。⁴⁾ラコフが、現代アメリカ英語の女性語に多い尻上りの抑揚は、丁寧で控え目な態度、すなわち自己主張の弱さを示唆している、と言っていることはすでに述べた。

伊藤整はまた、女性は一般に情緒ある生活や行動を好むと言っている。⁵⁾生物学者松原純子氏は、既成の男らしさと女らしさを比較して、前者に論理性、後者に直感性をあげている。⁶⁾女性は一般に、理窟の面よりも感情の面が発達していると言われているが、これは、男性によって自己主張を抑えられ、〈弱く〉〈従順な〉生き方を強いられてきた女性の歴史に鑑みて、必然的な結果であろう。女性が論理的でないということは、女性はものごとを抽象したり体系化して把握するのではなくて、あるがままの全体像を具体的に把握する能力に秀でている、と言い換えてよいだろう。

以上のことから、「弱く、やさしく、感情的で、具体的なレベルで考え行動する人間」が、現代の日米両文化圏における、共通の女性のステレオタイプである、と言えらると思う。

さて、このような女性的特質は、アメリカ社会においてどのような位置を占めているのであろうか。この問題点をおし進める前に、アメリカ人の文化的特性というものを知っておかなければならない。ある民族の民族性を一般化して論じることは、危険なことであるし、不正確な、ある場合には誤った理解しか得られないかもしれない。しかし、いくつかの例外や変則を前提とした上で、ある民族の特質を最大公約的に把握することは可能であるし、必要なことで

もあろう。ここではそのような観点から、アメリカ人の文化的特性を論じたい。

アメリカ人の文化的特性を総合的に知るには、文化人類学者ディーン・パーランド氏の行なった研究調査の結果を、ある程度参考にしてよいだろう。これは、日米の大学生 164 名に、34 の形容詞（又は形容語句）を列記した表を与え、日本人同志が話している場面と、アメリカ人同志が話している場面を観察させ、それぞれのグループの様子をもっともよく言い表わしている形容詞を五つ選ばせる、という方法で行われた。その結果、アメリカ人の特性を表わす語としてもっとも多かったのは《self-assertive》（出しゃばっている）と《frank》（卒直な）の二語であった。次いで《independent》（主体的な）、《talkative》（口数の多い）などが上げられ、少数（164 名中 10 名ほど）ではあるが《masculine》（男性的な）という語も上っている。⁷⁾

これらの言葉から浮び上るアメリカ人のステレオタイプは、「言葉をつくして、はっきりと自分の考えを述べ、主体的に生きる人間」である。これは偶然にも、上で述べた現代の女性のステレオタイプと非常に対照的である。女性と相反する性は、いうまでもなく男性であるから、ここに上っているアメリカ人の特性は、現代の男性の特性と一致するということが容易に想定できそうであるが、念のために『広辞苑』と『ウェブスター大辞典』で、男性の定義を調べてみた。前者には、〈強い〉こと、〈しっかりしている〉ことが、後者には《courage》（勇気）、《strength》（大胆さ）、《resoluteness》（決断力）、《openness》（卒直さ）などが、男性の属性として上っている。

現代のアメリカ人のステレオタイプは、現代文化における男性のステレオタイプを、言葉を換えて述べているにすぎない、ということが、これで明らかである。上で述べた、アメリカ人のような考え方、生き方は、〈勇気〉と〈決断力〉と〈卒直さ〉がなければ不可能だからである。このような特質を持ったアメリカ文化においては、女性的特質は否定的に評価されると考えてよいであろう。ラコフは、現代のアメリカ女性が使用を強いられている女性語は、結果として女性の地位を卑しめ、⁸⁾ 女性を権力の座から追い出している、⁹⁾ と主張している。

それでは、日本語文化と女性的特質の関係はどうであろうか。前述の、パーランド氏の調査研究によると、日本人の文化的特質をもっともよく表わしている語として上っているのは、《reserved》(控え目な)、《evasive》(あいまいな)、《silent》(口数の少ない)、《dependent》(依存的な)、そして《seeking a protective relationship》(甘えている)¹⁰の五語である。アメリカ人の特性と非常に対照的である。アメリカの社会学者ネイサン・グレイザー氏は、日本人(男性)が、相手との厳しい対決を避けるのに汲汲としている(“very anxious to avoid stark confrontation”¹¹)ことを指摘している。他との対立を避けようとする心理、あるいは、他との同化を求めようとする心理は、精神医学者土居健郎氏が、「分離の事実を否定し分離の痛みを止揚しようとする」¹²心理と定義した、甘えの心理に他ならない。

甘え、または同化という日本人の心理構造は、日本語の一人称と二人称代名詞のあり方によく現われている。日本語の一人称、二人称代名詞の種類は、ヨーロッパ語のそれにくらべて非常に多い。男女の性別や年齢身分の上下によって、さまざまに使い分けられている。しかも、氏名、親族名、職業名及び役職名が、一、二人称代名詞として使われる場合が多い。ヨーロッパ語の一人称代名詞と二人称代名詞は、契約書における売手と買手のような、基本的に利害が相反する関係を表わしている。英語の *love affair* やフランス語の *commerce* が、ともに《恋愛》を意味していることは、この事実を示唆している。*affair* や *commerce* には、本来《商取引》の意味がある。一方、日本語の一人称代名詞と二人称代名詞は、基本的に利害を共有する二者の関係を表わしている。つまり、ミウチの、一心同体の関係である。ヨーロッパ語のように、自分と相手の呼称を、単なる役割の違いによって決めるわけにはいかない。つねに、ウチなる関係である相手に対する遠慮や、気兼ねや、察しが働らき、その場その場に応じた多種多様の呼称が生れたということが考えられる。

日本語の一、二人称代名詞の数が多し理由として、上のような事情が考えられることは、すでに国語学者大野晋氏¹³によって指摘されている。大野氏はさらに、奈良時代以前にわたしを意味する《己》という字に当てられていた《な》

という者が、奈良時代にはあなたを意味する《汝》という字に当てられるようになった事実を取りあげ、日本人の、我と汝を同一視したがる心理構造を分析説明している。現代でも、¹⁴⁾《ボク》が二人称代名詞として使われることがある（たとえば「ボクのお家どこ？」という使い方）が、これも同じ心理の現われと考えるとよいだろう。

日本語に非常に多く、インド・ヨーロッパ語系言語にはきわめて少ないとされているものに、オノマトベ（擬声擬態語）がある。「雨がしとしと降っている」の《しとしと》、「蝶がひらひら舞っている」の《ひらひら》がそれに当る。オノマトベは、物の性質や状態を客観的に見て対象化させたのではなく、「自分自身の情意や感覚と対象とを融合させ重ね合わせ、未分化のままで言語化してゆく表現法」¹⁵⁾と、大野氏は定義している。

古典日本語には、ク活用とシク活用の二通りの形容詞があったことは衆知の事実である。前者は、ものの性状を客観的に叙述し（例、あかし）、後者はそれを主観的、すなわち情意的に叙述している（例、あさまし）。古典日本語には、もともと、ク活用形容詞の単語は少なかった。シク活用形容詞の数も、はじめはとくに多いわけではなかったらしいが、ク活用形容詞（例、おもし）の語幹を重ねて、新しくシク活用形容詞（例、おもおもし）を作るようになって、次第にその数が増えたと考えられる。¹⁶⁾

日本語の、オノマトベと形容詞に関するこれらの特徴は、日本人が、情緒の面で発達した精神構造を持った民族であることを証明している。それを裏返せば、日本人は論理性あるいは抽象性が欠けた民族であるということになるだろう。日本では昔から、哲学や数学は発達せず、抒情詩、物語、歴史文学が発達したこと、そして、従来の日本語には抽象名詞が少なく、西洋伝来の概念を翻訳するときには、漢字を使わなければならないこと、などが、それを如実に物語っている。

以上で、日本語文化と女性的特質が、甘えや同化を根拠とする《依存性》、《情緒性》または《非論理性》、《非抽象性》または《具体性》という点で一致していることを、ある程度明らかにしたつもりである。したがって、英語文化

(アメリカ社会)の場合とは逆に、日本語文化あるいは日本社会においては、女性的特質は肯定的に評価されると考えてよいであろう。英語の女性語は、女性蔑視の現われである(注8参照)、という、ロビン・ラコフのような戦闘的な考えは、日本社会では生れにくい。日本語の女性語は、単なる区別であって社会的差別ではない、また、女性特有の感情を表現する女性語をなくす必要はない、¹⁷⁾ というような穏当な見解が、現在のところは優勢である。¹⁸⁾

注

- 1) Lakoff, Robin, *Language and Woman's Place*, Harper & Row, New York, 1975, pp. 16-18.
- 2) 野元菊雄『日本人と日本語』筑摩書房, 1978, 136ページ。
- 3) 林 巨樹『日本の言の葉』東京書籍, 1979, 37ページ。著者はここで、自分自身をモデルに〈食べる〉の敬語的同義語を論じながら、同年輩の男友だちには「何を食ったの?」と言うが、同年輩の女友だちには「何を食べたの?」と言う事実を指摘している。
- 4) 伊藤 整『女性に関する十二章』角川書店, 1978, 40ページ。
- 5) 同書, 48ページ。
- 6) 松原純子『女の論理』サイマル出版会, 1980, 54ページ。
- 7) バーンランド, D. C. (西山千訳)『日本人の表現構造』サイマル出版会, 1973, 60-61ページ。
- 8) Lakoff, *op. cit.*, p. 5.
- 9) Lakoff, *op. cit.*, p. 14.
- 10) バーンランド, 前掲書, 60-61ページ。
- 11) Glazer, Nathan, "From Ruth Benedict to Herman Kahn: The Postwar Japanese Image in the American Mind," *Mutual Image*, ed. by Irie, Akira, Harvard University Press, 1975, p. 159.
- 12) 大塚久雄, 川島武宜, 土居健郎『「甘え」と社会科学』弘文堂, 1976, 10ページ。
- 13) 大野 晋『日本語の文法を考える』岩波書店, 1978, 76-77ページ。
- 14) 同書, 78-79ページ。
- 15) 同書, 71ページ。
- 16) 同書, 93ページ。
- 17) 野元菊雄, 前掲書, 143ページ。
- 18) 大石初太郎他「女のことば・男のことば」(座談会), 『言語生活』1973年7月号, 5ページ。

参考文献目録

- バーンランド, D. C. (西山千訳), 『日本人の表現構造』サイマル出版会, 1973。
 別府春海他(座談会), 「間違いだらけの《日本人論》」, 『朝日ジャーナル』1980年9月2日号, 26-33ページ。

- Friedan, Betty, *It Changed My Life*, Random House, New York, 1976.
- Glazer, Nathan, "From Ruth Benedict to Herman Kahn: The Postwar Japanese Image in the American Mind," *Mutual Image*, Irie, Akira, ed., Harvard University Press, 1975.
- 花田清輝『復興期の精神』講談社, 1980。
- 林 巨樹『日本の言の葉』東京書籍, 1979。
- 樋口恵子「女のことばと男のことば」, 『言語生活』1980年5月号, 47ページ。
- 井上輝子『女性学とその周辺』勁草書房, 1980。
- 伊藤 整『女性に関する十二章』角川書店, 1978。
- 岩男寿美子, 原ひろ子『女性学ことはじめ』講談社, 1979。
- 寿岳章子『日本語と女』岩波書店, 1979。
- 鍛冶千鶴子他(座談会), 「言葉の彼方に」, 『言語生活』1981年2月号, 2-15ページ。
- Lakoff, Robin, *Language and Woman's Place*, Harper & Row, Publishers, New York, 1975.
- マッコビイ, エレナー(青木やよひ他訳)『性差』家政教育社, 1980。
- 松原純子『女の論理』サイマル出版会, 1980。
- 西山 千『誤解と理解』サイマル出版会, 1972。
- 野元菊雄『日本人と日本語』筑摩書房, 1978。
- 大石初太郎他(座談会)「女のことば・男のことば」, 『言語生活』1973年7月号, 2-11ページ。
- 大野 晋『日本語の文法を考える』岩波書店, 1978。
- 大塚久雄, 川島武宜, 土居健郎『「甘え」と社会科学』弘文堂, 1976。
- 佐々木孝次『心の探究』せりか書房, 1980。
- 千石 保『日本人の人間観』日本経済新聞社, 1974。
- 司馬遼太郎, キーン, ドナルド『日本人と日本文化』中央公論社, 1972。
- Stevens, Ruth, "Japanese Women's Language: A Sociolinguistic Analysis," unpublished term paper, Harvard University, 1977.
- 鈴木孝夫『ことばと文化』岩波書店, 1973。
- 辻村敏樹『敬語の史的研究』東京堂出版, 1976。
- 角田忠信『日本人の脳』大修館書店, 1978。